菅井準一の寺田寅彦評と或る「思い込み」

四宮義正

科学史研究家の菅井準一（明治 36 年～昭和 57 年）と原光雄（明治 42 年～平成 8 年）、理論物理学者・伏見康治（明治 42 年～平成 20 年）の三人をめぐる小さなドラマについて、簡単に記してみる。寺田寅彦のファンにとっては、とても残念な出来事であった。

1．菅井準一の寺田寅彦評

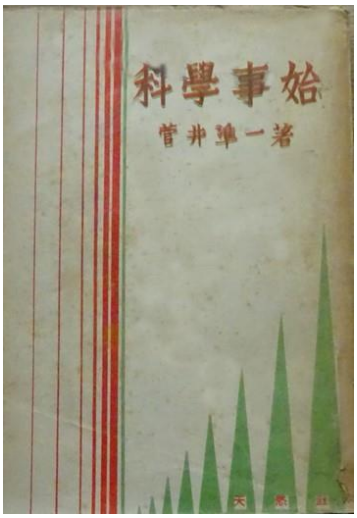
菅井は科学史に関する著作や翻訳書をたくさん出しているが、寺田寅彦についても次の 2 点がある。

①「世界的科学者の横顔―プランク・パブロフ・寅彦」（『改造』18 巻 10 号、昭和 11 年）

これは、『科学のこころ』（昭和 16 年、中央公論社）、『科学事始』（昭和 21 年、天然社）に再録されている。基本的に同じ内容であるが、若干の修正があるので、『科学事始』から要部を引用する。

〈プランク・パブロフ・寅彦〉

その生涯を貫いて物された二百数十の論文に盛られた多彩極まる諸研究はあの虚弱な肉体を以てしては驚嘆に値するものであつた。しかもそれが多くの場合、凡庸な我々の企及し得ない独自なものであり、常に前人未踏の処女地を開拓して行つた事は先生の非凡な科学的識見と科学真理に対する熱情なしには果し得なかつた事である。特に墨流し、線香花火、金平糖、割れ目等日常身辺の物理学的諸問題やキリンの縞模様の考察等は種々の論難にも拘らず、先生の探究者としての特異な態度から生れたものである。先生はかやうな現象をただ物好きから選択したのではなく、自然事実の観察、実験を無親して体系化を試みるに汲々たる凡庸な学徒に対して云はば教科書的物理学の勝れた傍註として試みたものではなかつたらうか。



『科学事始』表紙
（昭和 21 年、天然社）

一体に先生の論文には数式の少く、実験設備も問題に依つて風変りな一見原始的とでもいへる装置さへも見られる。この点である人々は先生の科学者としての業績を割引きしてゐる筋合もある様である。併し先生の問題にされた複雑多岐な自然現象では到底現在の数学は使ひこなせないものであり観測自身の精密度にしても高く要求出来ないものである限り止むを得ない事としなくてはならない。むしろ先生は物理学の現段階での認識方法を以てして現実の自然現象が何の程度迄解決し得るかを真剣に探し求めたのであり、科学の前進のための先駆となつたのである。茲で紀元一世紀の詩人、哲学者、科学者として有名なルクレチウスに関する先生の勝れた覚え書き（これは筆者として最も思ひ出深い一篇なのだが）の一節を想起する事は無意味ではあるまい。……

②菅井準一『生活科学への道』（昭和 17 年、羽田書店）

菅井は寺田の講義を聴いたことがあるとのことである。この本では 30 ページを費やして「偉い科学者の歩いた道」として寺田の小伝を書いている。中谷宇吉郎、宇田道隆、安倍能成などの多くの文献から引用して、①「世界的科学者の横顔―プランク・パブロフ・寅彦」で述べたことを、より詳しくしたものである。

どちらの文献でも、いわゆる「日常周辺の物理学」を非常に高く評価していて、悪口に類することは一切書かれていない。

２．伏見康治の一連の「思い込み」発言

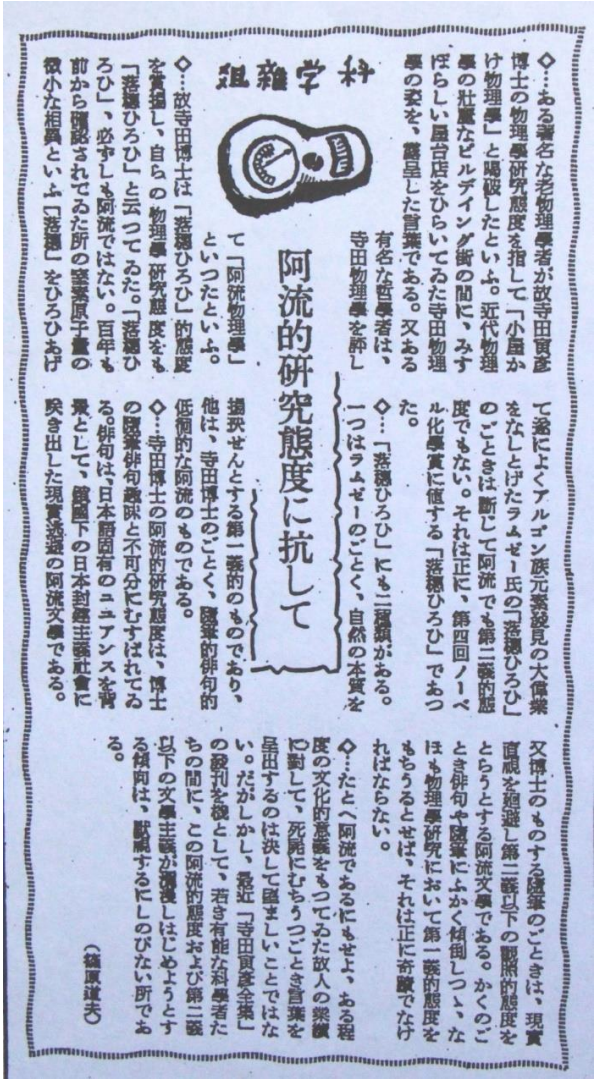
伏見には菅井に関して、思い違いと思われる一連の発言がある。比較的初期で、科学史に関心のある人から眼につきやすく、また手元にある資料として「日本における物理学の成立」（日本物理学会編『日本の物理学史（上）歴史・ 回想編』昭和 53 年、東海大学出版会）から簡潔に引用する。

…一世を風靡している寺田物理学というのが、当時大学新聞なんかを見ますと相当こっぴどく批判されておりまして、たとえば菅井準一さんは、寺田物理学は小屋がけ学問であるといって非常に率直に批判しているわけです。…

伏見は統計にも詳しく、寺田の〈偶然現象の見かけの周期〉（外見周期あるいは疑似周期とも）発見を非常に高く評価し、数学的に証明した亀田豊治朗と合わせて「寺田・亀田の定理」として紹介している。（＊1）しかし、菅井準一の寺田批判については繰り返し言及している。これは大森一彦のまとめがある。（＊2）

３．原光雄［筆名：篠原道夫・菅村隆二］の新聞記事と論文

伏見の読んだと思われる「大学新聞」について大森が指摘している（＊2）。記事の写真（右）を示し、冒頭部を転記する。



科学雑俎

阿流的研究態度に抗して

◇…ある著名な老物理學者が故寺田寅彦博士の物理學研究態度を指して「小屋かけ物理學」と喝破したといふ。近代物理學の壯麗なビルディング街の間に、みすぼらしい屋台店をひらいてゐた寺田物理學の委を、露呈した言葉である。又ある有名な哲學者は、寺田物理學を評して「阿流物理學」といつたといふ。

◇…故寺田博士は「落穂ひろひ」的態度を賞揚し、自らの物理學研究態度をも「落穂ひろひ」と云つてゐた。「落穂ひろひ」、必ずしも阿流ではない。百年も前から確認されてゐた所の窒素原子量の微小な相異といふ「落穂」をひろひあげて遂によくアルゴン族元素發見の大偉業をなしとげたラムゼー氏の「落穂ひろひ」のごときは、断じて阿流でも第二義的態度でもない。それは正に、第四回ノーベル化學賞に値する「落穂ひろひ」であつた。

◇…「落穂ひろひ」にも二種類がある。一つはラムゼーのごとく、自然の本質を掴択せんとする第一義的のものであり、他は、寺田博士のごとく、隨筆的俳句的低徊的な阿流のものである。

◇…寺田博士の阿流的研究態度は、博士の隨筆俳句趣味と不可分にむすばれてゐる。俳句は、日本語固有のニュアンスを背景として、國土の日本封建主義社會に咲き出した現實逃避の阿流文學である。

又博士のものする隨筆のごときは、現實直視を逃避し第二義以下の觀照的態度をとらうとする阿流文學である。かくのごとき俳句や隨筆にふかく傾倒しつゝ、なほも物理學研究において第一義的態度をもちうるとせば、それは正に奇蹟でなければならない。

◇…たとへ阿流であるにもせよ、ある程度の文化的意義をもつてゐた故人の業績に對して、死屍にむちうつごとき言葉を吾田するのは決して嬉しいことではない。だがしかし、最近「寺田寅彦全集」の發刊を機として、若き有能な科學者たちの間に、この阿流的態度および第二義以下の文學主義が復活しはじめようとする傾向は、默視するにしのびない所である。

（篠原道夫）

篠原道夫「阿流的研究態度に抗して」（〈科学雑俎〉『帝国大学新聞』660 号、昭和 12 年 2 月 15 日）

ある著名な老物理学者が故寺田寅彦博士の物理学研究態度を指して「小屋かけ物理学」と喝破したという。近代物理学の壮麗なビルデイング街の間に、

みすぼらしい屋台店をひらいていた寺田物理学の姿を、露呈した言葉である。又ある有名な哲学者は、寺田物理学を評して「阿流物理学」といったという。…

寺田物理學の一批判

七四

寺田物理學の一批判

―自然辯證法具體化の試み―

菅村隆二

多くの過去の自然科學者たちは、その研究活動において方法論的でなかつた。かれらの研究はインスピレーションといふ風な神祕的なものによつて支配された。そしてこのインスピレーションたるや、ある場合には科學者の業績に榮光をあたへたが、他の場合にはその研究を徒勞に終らしめた。だが科學的研究のアイデアを、インスピレーションなどといふ超論理的なもので蔽ふことは、自然科學および科學方法論の現段階から見て、まつたく非科學的である。あらゆる自然科學的研究のアイデア、實驗方針、などは、强固なる科學的方法論の見地から、科學的論理的に導きだされねばならない。吾々は、ふるい自然科學論文雜誌をひもとくとき、先輩科學者たちの研究の中に、多くの盲目的徒勞が存在して居り、たまゝ將來に大きな足跡をのこした研究といへども、まつたく偶然的な靈感（インスピレーション）によつたものが多いことを見る。科學的精神と論理的思惟とをあくまで尊ぶ現代の自然科學者は、神祕的な衣をまとへるインスピレーションなるものゝ本質をあばき出し、あらゆる科學研究を徒勞から救はねばならぬ。

嘗てこの國の自然辯證法論者の間に、「自然辯證法は自然科學研究の具體的な方法論たり得るか」といふ問題が論議された。一九三四年から一九三五年にかけて本誌上でおこなはれた「自然辯證法具體化の論爭」がそれである。この論爭は、論者の全部が自然科學者でなかつたために、討論があまりに抽象的觀念的におこなはれて、多くの自然科學々徒の嫌惡をまねき、「一般論反對」といふ聲のみを昂めさせる結果となつてしまつた。「自然辯證法は具體的な自然科學研究の方法たり得るか」といふ論議の中心點も、結局うやむやの中に葬り去られてしまつたやうである。だが考へてみると、このやうな問題提起自身が甚だ觀念論的なものであつた。論者

上記は短い記事であったが、菅村隆二「寺田物理学の一批判―自然弁証法具体化の試み―」（『唯物論研究』第 55 号、昭和 12 年）は 17 ページの長い論文（右写真は冒頭部）であり、寺田物理学を厳しく批判している。ここでは、「寺田物理学」に関する部分だけ短く引用する。

…日常身辺的事象の研究にも二種類がある。一つはかかる平凡な事象の背後に、未知の革命的な自然の原理がひそんでいることをあばき出すものであり、他は既知の物理学的原理または法則を、これらの複雑な事象に適用して、これを説明するものである。前者の研究態度は、自然の本質をつきすすんで剔抉（てっけつ）するという、自然科学の第一義的目標に合致するが、後者の場合には、あたかも中学生が例題のあとに出てくる応用問題を解くときのような、単なる応用物理学的研究におちいることがしばしばある。寺田物理学の日常身辺性は正にこの後者に相当するように思われる。即ち、それは、「日常身辺的の複雑な諸事情も、かくのごとくにすれば説明できる」ことを示すのに専念する。上にあげた二三の論文を見てもこのことは明かであろう。このように、日常身辺的事象に既知の原理法則を適用して、その応用問題解法を見出すごときは、いささか随筆的ヂレツタント的低調的な研究態度であって、第一線に立つ科学者にとって「亜流」であり「小屋がけ」であることは、あえて断言してはばからない。何事によらず精力的第一義的のことが嫌いで、最後をごまかしてしまおうとする寺田博士の傾向が、ここにもまた現われている。…

この論文は原光雄の著として『自然弁証法の研究』（昭和 21 年、大雅堂）に再録されている。筆者の読後感として、寺田は、「難しいことをやさしく書く」が、原は「やさしい事を難しく書く」という印象であった。なお、この論文について藤井陽一郎の詳しい反論がある（＊3）。

原の筆名に関しては、本人が「日本科学史学会と私：創立の頃の思い出」（『科学史研究』第 29 巻 No. 174、平成 2 年）で明かしているので転記する。

京大在職中、私は1936年から37年にかけての1年半ほどの間、左翼的思想雑誌『唯物論研究』に自然弁証法に関する幾つかの論文や書評などをペンネーム（篠原道夫または菅村隆二）で投稿していた。1937年5月号に掲載された「寺田物理学の一批判」は、自然弁証法の見地から、いわゆる寺田物理学を批判したものであって、若干の注目をあつめた。

４．考察

篠原道夫も菅村隆二も一時のペンネームで、あまり知られていない名前であったと思われる。伏見は昭和12年2月15日付の『大学新聞記事』（篠原）を読み、約3ケ月後に雑誌『唯物論研究』（菅村）を読んで、同じ内容なので、菅村隆二から菅井準一を連想し、大学新聞記事の著者が菅井準一と記憶されてしまったのかもしれない。（もともと菅井を意識した筆名のような気がする。）

対談などで同じ内容を繰り返し発言し、記録しているので、とても残念なことであった。後の寺田寅彦研究書で、この誤解を踏襲している事例もある。「小屋掛け物理」はごく少数の意見だったが、寺田について書く時、枕にもってくることで面白く話が進めやすいようで後世の言及は多い。

菅井はこの誤解を知っていただろうか。没年を考えると、知り得るタイミングであるが、第6代の日本科学史学会会長を務めた平田寛によると（＊4)、長い闘病の末に亡くなったようだから、多分知らなかったであろう。

逆に原は伏見の誤解を知っていたのだろうか。没年からみて充分知り得たであろう。「日本科学史学会と私：創立の頃の思い出」で筆名を明かしたのは、伏見の誤解を知ったことが一つの思い切りにつながったような気がする。伏見と原が同じ年の生まれであることも奇縁だと思う。原はこの「思い出」に、自分が日本科学史学会の発起人44名中の一人であり、その真の発起人は菅井であることや、菅井、加藤正、原の三人で神戸の繁華街のレストランに立寄り、科学史に情熱を傾注して語り合った情景を快い印象として記載している。また、日本科学史学会の関西支部創立に際して、大阪大学理学部教授の伏見と協力したことも記している。

大森もよく言っていたが、伏見は経歴や研究業績、著書等からみて非常に発言力と影響力のある人物であったから、どこかの時点で軌道修正ができていれば良かった、と思うのである。

〈注と参考文献〉

（注）引用文は旧漢字を新漢字に変更したり仮名遣いを変更したところがある。

＊1）伏見康治「ふりこの振動を追って（11）乱雑な外力」（『数学セミナー』14巻4号、1975年、日本評論社）

＊2）大森一彦■寺田寅彦と現代科学の午後■「寅彦先生の「悪口」―展望・寺田物理学批判」（2004年7月31日）

＊3）藤井陽一郎「唯物論者原光雄の寺田寅彦の物理学への批判について」（『物理学史研究』3巻6号、1967年）

＊4）平田寛「日本科学史学会創立と菅井準一先生」（『科学史研究』22巻145号、1983年）

○加藤茂生「「小屋掛け学問」という批評をめぐって」（『寺田寅彦全集』（第2次刊行）、第3巻月報、2009年、岩波書店）